

# 変わらないもの

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

## 登場人物

- 石倉久司 25歳。研修医1年目。  
森崎晶子<sup>しょうこ</sup> 32歳。整形外科医。  
松本太一 35歳。晶子の同級生。  
峰山豊 30歳。  
城所<sup>きどころ</sup>廣行 58歳。整形外科部長。  
吉田まり 21歳。新米看護婦。  
安部弓子 29歳。ベテラン看護婦。  
向井房江 48歳。石倉の受け持ち患者。  
向井完治 50歳。房江の夫。

## < 前編 >

(手術室。心電図モニターや麻酔の機械の単調な音。)

- 城所 「メス。」  
安部 「はい。」  
城所 「血圧は？」  
安部 「120の72です。」  
城所 「うむ。ちょっと暗いな。ライト右に寄せて。」  
安部 「はい。」  
城所 「おい、手術部位が見えないぞ、石倉。」  
石倉 「...。」  
城所 「もっと広げて。…石倉？」

石倉 「zzz(いびき)。」

城所 「石倉！ この、ボンクラー！」

(音楽。タイトル 岡崎ルツ子作 ドラマ「変わらないもの」その前編)

(病院の廊下を晶子と石倉が歩いている。)

晶子 「まったく馬鹿じゃないの。城所部長の大事なオペに居眠りなんて。」

石倉 「すみません。でも僕、前日は当直で、その前は学会の調べものしてて、寝てないんです。」

晶子 「そんなの言い訳にならない。フレッシュマンのうちはね、徹夜なんて当たり前。」

石倉 「はあ...。」

晶子 「いい大学出てたって、勉強が出来るのと仕事出来るのとは別なの！」

石倉 「ハイ...。」

晶子 「あんたみたいなボンクラ教えるわたしの立場も考えてよね。」

石倉 「はあ...(ためいき)」

N 僕は石倉久司。免許取りたての整形外科の医者である。都内の大学病院に勤務している。九州の炭鉱の町から、地元の期待を一身に受け、名医になるという志を抱いて上京してきたのだが、現実は厳しい。連日のハードワークに、ドジばかりで、指導にあたる森崎晶子先生には迷惑のかけっぱなし。晶子先生は、目の印象的な美人で、仕事もバリバリだが、きつい性格で僕は怒られてばかり。きれいなバラには、やっぱりトゲがあるのだ。

晶子 「あら、(声が変わり)京極先生、今日当直でしょ？」

京極 「うん。」  
晶子 「差し入れ、持って行きますね。」  
京極 「いつもありがとう。」  
晶子 「(声戻り)あ、ボンクラ君、この資料ワープロしといて。」  
石倉 「え？」  
晶子 「頼むわね。行きましょ、京極先生。」

N 晶子先生はうれしそうに京極先生と行ってしまった。もと公家という家柄の京極先生は、竹之内豊似のかっこいい先生で、アマチュアレーサーでもある。うらやましい限りだ。

(夜の医局。カチカチとパソコンの音)

N 誰もいない夜の医局で、僕は一人パソコンに向かっていた。気分転換に窓の外を眺めても、都会の夜空は星がなく、月がかかっているだけだ。

石倉 「は～、晶子先生が、京極先生の半分でも優しくしてくれたらなあ。」  
松本 「無理無理。」  
石倉 「あ、松本先生。」  
松本 「ボンクラ君がひとりわびしくパソコンに向かっているからさ、励ましてやろうと思ってね。」

N 松本先生は年は上だが、晶子先生と大学の同級生である。背が高く、顔が長めで目が優しい、何となく馬を思わせる顔立ちだ。キリスト教徒らしいが、なぜか「仏の松ちゃん」と呼ばれている。独身で、医局に住みついていてといううわさだ。

松本 「しょぼくてんなあ。」

石倉 「なんか...窓から見える月が寂しくて、なんで医者なんかになったんだろうって。」

松本 「おいおい、腹減ってるんじゃないのか？ サンマ焼いてやろうか。」

石倉 「サンマ？」

N 見ると松本先生は医局の冷蔵庫から、サンマと大根を取り出し、なれた手つきでコンロに網をのせてサンマを焼き出した。

松本 「サンマには、やっぱ大根おろしだよ。」

N そう言うと先生は、なんと、机の引き出しからおろし金を取り出して、ゴシゴシ大根をすり始めた。

松本 「新人の時は、誰だって失敗はするんだ。一つ一つが大事な経験なんだからぞ。」

石倉 「はあ...。」

松本 「努力だよ。それには体力がいるからな、腹が減っては戦ができんって、あー、いい匂いだ。」

N もうもうと白い煙を上げながら、サンマが香ばしい匂いを漂わせたその時。

(非常ベル鳴り響く)

松本 「まずい、ボンクラ、火を消せ！」

石倉 「はいっ、あ、あち、あちちちっ。」

N 医者の仕事は、手術、学会の準備や研究、受け持ち患者の診察と、山

のようにある。僕が担当している向井房江さんは、股関節の手術をした40代の主婦である。

石倉 「お待たせしました。向井さん、痛みありますか？」  
房江 「おかげさまで大分取れました。あの、今日主人が石倉先生に御挨拶したいと、来てますの。よろしいですか？」  
石倉 「構いませんよ。どうぞ。」  
完治 「向井です。家内がお世話になりました。」  
石倉 「奥さんは大変に努力されて、今のところは順調です。」  
完治 「先生、ゆっくり入院させてやって下さい。家のほうは娘もいますし、何とかありますから。」  
房江 「お父さんったら。」  
石倉 「優しい御主人ですね。」  
完治 「いや、なに。」  
(なごやかに笑いあう。)

(ナースステーション)

石倉 「向井さんの御主人って優しいよな。無理せず入院させてやってくれってさ。はい、点滴指示書いたよ。」  
吉田 「やだ、先生知らないの？」  
石倉 「何が？」  
安部 「いい御主人が、面会は週に1回だけ、それも来るか来ないかなんてことありますか。」  
石倉 「え、どういうこと？」  
吉田 「向井さんの御主人ね、20も年下の女の人がいるんですよ。娘さんからスタッフが相談受けて。」  
石倉 「うそだろ。」

吉田 「奥さんが入院している間にそうなっちゃったみたいで。」

安部 「もし向井さんに知れたら、リハビリだって意欲なくしちゃうでしょ。わたしたち、気をつけているんです。」

石倉 「ほんとかよ…」

(新宿御苑)

N 週末、僕は松本先生と、新宿御苑のベンチに座って缶コーヒーを飲んでいた。サンマ事件以来、僕は松本先生とつるんでいることが多くなった。

石倉 「考えちゃいますよ。」

松本 「ん？」

石倉 「その方の御主人だって、もとはまじめで家族思いだったそうなんですよね。」

松本 「人の気持ちは、変わってしまうからなあ。」

N うららかな秋の日差しの中で、あちこちでカップルが語り合っている。

石倉 「あーあ、カップルばっか。」

松本 「おい、あんなもの、口開けて見てないで、紅葉をってみろよ。見事だなー。神の創造の素晴らしさを感じるね。」

石倉 「あ！」

松本 「どうした？」

石倉 「あれ、京極先生じゃないですか？」

N 驚いたことに、スーツでキメた美男の京極先生が、藤原紀香似の美女の肩に手を回して、楽しそうに歩いているのではないか。

石倉 「あの美人誰だろ？ もしかしてレースクイーンとか。」  
松本 「まさか。」  
石倉 「まずいっすよ。晶子先生に言ったほうが。」  
松本 「待てよ。まだカノジョと決まったわけじゃないだろ。」  
石倉 「そんなこと言ったって。」  
松本 「絶対に言うなよ。晶子先生に。」  
石倉 「言うなっただって。」  
松本 「とにかく言うな。晶子ちゃんが悲しむ。」

N 京極先生と一緒にいる時の幸せそうな晶子先生の笑顔を思い浮かべながら、  
僕たちはふたりの後ろ姿を黙って見送っていた…。

< 後編 >

(新宿御苑)

石倉 「あ、あれっ。」  
松本 「どうした？」  
石倉 「京極先生じゃないですか。隣の美人、誰だろ。」  
松本 「言うなよ。晶子先生に。」  
石倉 「言うなっただって。」  
松本 「絶対に言うな。晶子ちゃんが悲しむ。」

(音楽・タイトル 岡崎ルツ子作 ドラマ「変わらないもの」その後編)

N 僕は石倉久司。新米の整形外科医である。名医になりたいと思っ  
ているのだが、いつもドジばかり。指導の森崎晶子先生に叱られっぱなし  
だ。そんな僕を慰めてくれるクリスチャンの松本先生、やり手の城所部

長、いろんな人達に囲まれて、僕は今日も悪戦苦闘の日々を送っている。そんな中、偶然に僕は、晶子先生の恋人、京極先生が、藤原紀香似の女性と親しげに歩いているのを目撃した。

(ナースステーション)

石倉 「晶子先生、このCT、ちょっと教えてもらいたいですけど。」

晶子 「いいわよ。あ、これね、こういうのはただの関節炎と間違えやすいんだけど...。」

N 仕事をしているときの晶子先生はキリリとしている。その横顔を見ていると、京極先生の顔と、そしていやおうなしに、新宿御苑で先生と連れ立っていた美人の顔を思い出してしまった。

晶子 「ちょっと、聞ってるの？」

石倉 「あ、はい。」

吉田 「石倉先生、晶子先生に見とれてたのよねえ。」

石倉 「違うって。」

吉田 「晶子先生、土曜の病棟のテニス行きます？」

晶子 「ごめん、パス。京極先生のレースの応援に行くの。」

吉田 「わあ、アツアツ。また手作りのお弁当ですかあ。」

晶子 「ま、ね。」

(きゃーきゃーと楽しげな女性達。)

N からかわれてまんざらでもなさそうな晶子先生を見ていると、僕はなんだか暗い気持ちになるのだった。

(病室)

吉田 「回診です。」  
晶子 「斎藤さん、いかがですか？」  
斎藤 「あら、今日は京極先生は？」  
吉田 「京極先生は出張でいらっしゃいません。晶子先生が代わりに診察します。」  
晶子 「膝のガーゼ交換しますね。石倉先生、足先持って。」  
石倉 「はい、ちょっと失礼します。」  
斎藤 「足、重いでしょ？太ってごめんなさいよ。」  
石倉 「だ、だいじょうぶです。」  
斎藤 「あたしもさ、もう少しスタイル良かったら、ハンサムな京極先生にアタックするんだけどねえ。」  
晶子 「消毒。」  
吉田 「はい。」  
斎藤 「京極先生、結婚するっていうじゃない。」  
晶子 「え！？」

N 晶子先生が、消毒綿を取り落とした。

斎藤 「大学の恩師の娘さんだってよ。みんなの間ですごいわさ。じきに大学に戻るんだってねえ。」

晶子 「そうなんですか、知らなかった。ごめん、もう一度消毒くれる？」

N 晶子先生の手が震えていた。顔も真っ青だ。あの新宿御苑で見たきれいな人は、京極先生のフィアンセだったのだ。回診が終わって、ナースステーションに戻る間、晶子先生は一言も口をきかなかった。

(銀座のお店。カウンターに晶子、松本、石倉が腰をおろしている。)

晶子 「ねえ、ボンクラ君、あんたワインのお代わりは？」(晶子、大分酔っている)

石倉 「僕、もうたくさんです。」

晶子 「何よ、たくさんって。全然飲んでないじゃないのよ。」

石倉 「飲んでますよ、結構。」

晶子 「ボンクラ！ 飲みなさい！」

松本 「おい、もう帰ろうよ。飲み過ぎだよ。」

晶子 「ごめんねえ、飲まない松ちゃんにまで付き合わせて。でもさ、今夜の送別会よかったわよねえ。お料理おいしくて、ねえー。」

N 来月大学に戻る京極先生の送別会の帰り、晶子先生に無理に引っ張られて、僕と松本先生は銀座でお店をはしごした。酔ってカウンターにもたれかかっている晶子先生は、いつものはつらつとした美人ではなく、なんだか道に迷った女の子みたいに頼りなかった。

晶子 「...きれいだって言ってくれたのに。」

石倉 「へ？...」

晶子 「わたしのこと、きれいだって言ってくれたの、京極先生。お弁当作ってレースの応援だって行ったわよ。先生の喜ぶ顔が見たくってさあ。(だんだん半泣き)」

松本 「うん、うん。」

晶子 「こっちは当直明けで疲れてたってさ、待っててくれると思うから、行くじゃない。」

石倉 「そうだ、そうだ。」

晶子 「…美人だって？ 相手の人。」

石倉 「いやあ、晶子先生のほうがきれいっすよ。絶対。」

晶子 「いいのよ、今更そんな気つかってくれなくても。どうせわたしはおばさん

だし。」

石倉 「まだまだ全然いけてますよ。」

晶子 「だまされちゃった…。馬鹿だな、わたしって…。」

石倉 「晶子先生…。」

晶子 「(がばっと起きあがり)何よ！ 男なんて、もう絶対信じないんだから！」

松本 「晶子ちゃん、もう帰ろう、ほら、終電に遅れるよ。明日もあるんだから、な。」

晶子 「う、う、う、き、気持ちわるーい。」

石倉 「だ、だいじょうぶですか、先生。ちょっと、晶子先生！」

N やつとのものでタクシーを拾い、大学病院に戻った時には、夜中の3時を回っていた。眠ってしまった晶子先生をおぶった松本先生と僕は、職員寮までの小道を歩いていた。空に満月が低くかかり、僕らの影をくっきり地面に落としている。

(ふたりの靴音のみ響く。静寂)

石倉 「…松本先生。」

松本 「ん？」

石倉 「前にも言っていましたよね。人の心は変わってしまうって。」

松本 「うん。」

石倉 「京極先生だって、最初は晶子先生のこと、本気だったんでしょ？」

松本 「…うん。」

(しばらく歩く。)

石倉 「きれいな月ですねえ。」

松本 「うん。」

石倉 「月は変わんないですね。」

松本 「え？」  
石倉 「だってほら、大昔からずっと、こうやって昇っては沈み、昇っては沈みし  
てるわけだし。考えてみると、雄大ですよ。」  
松本 「うん。…こんな言葉が聖書にあるよ。『神は、人の心に永遠への思いを  
与えられた。』」  
石倉 「永遠…ですか。そう言えば小さい頃、月とか星を観察していると、すごく  
長い時間を考えたもんだけど。」  
松本 「永遠の神様が、つくったものだからね。」  
石倉 「…神様、か。」

N 柄にもないそんな会話をしたのは、月の光のせいだったのだろうか。で  
もそのとき僕は、何となく、月や星をつくった神様がほんとにいるような  
気がした。

(ナースステーション)

吉田 「退院おめでとうございまあす。向井さん。」  
房江 「ありがとうございます。本当にお世話になりました。」  
石倉 「あせらず、ゆっくり御自宅でもりハビリして下さい。」  
房江 「はい。なるべくそうしたいんですけど。家のほうも色々ありまして。」

N 晴れて退院してうれしいはずの向井さんは、少し疲れたようなえみを浮  
かべた。僕はふと、これから待ってるかもしれない向井さんの家庭の修  
羅場を思って、複雑な気持ちになった。

完治 「それじゃ、これで。車待たしてますんで。」  
(口々に)「お大事に。」「お元気で。」  
晶子 「ボンクラ君。」

石倉 「あ、晶子先生。」  
晶子 「医局の机にピザあるから。おごり。」  
石倉 「えー、ほんとっすか？」  
晶子 「松本先生と分けて食べるのよ。この間のお礼。」  
石倉 「ありがとうございます！」  
晶子 「あ、そうだ、この間の君の論文、残念ながら書き直しだって。あとで部長の部屋に行って。」

N そう言い残すと、晶子先生はいつものようにさっそうと歩いて行った。  
“やれやれ、また失敗か”と思うと、ちょっぴり落ち込んだが、でも今の僕には、あの以前と変わらない晶子先生の明るい顔が何よりもうれしかった。目を上げると、雲ひとつない秋晴れの空に、ぽっかりと真昼の月が浮かんでいる。

モノ 「永遠... 変わらないもの、かあ。」

N ふと僕はつぶやいた。そして、あの空や月や星だけでなく、人の心の中にそれがあればいいのと思った。いや、その時、無性にそれが欲しかったのは、僕自身かもしれない。

< 完 >